HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「やさしい日本語」による市民との交流を取り入れた多文化クラスの活動
Author(s)	山田, 悦子
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 74, 45-57
Issue Date	2021-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80911
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_yamada.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【研究ノート】

「やさしい日本語」による市民との交流を取り入れた多文化クラスの活動

山　田　悦　子

1．活動の背景

本稿は、留学生と日本の学生[1]が共に学ぶ国際共修型の多文化クラス[2]において、北海道美唄市の観光振興政策と連携し、「やさしい日本語」による市民との交流活動を取り入れた授業についての実践報告である。

美唄市は札幌市と旭川市のほぼ中間地点に位置し、かつて空知地方の石炭産業の隆盛を担ってきたが、1970年代以降石炭産業は衰退し、日本の多くの地方都市と同じように人口減少という問題を抱えている[3]。近年は国の「観光立国推進基本計画」（2006年）や「北海道インバウンド加速化プロジェクト」（2016年）等、日本の観光振興政策の方向性に呼応するように、地域の活性化や雇用の創出も視野に入れた観光振興を目標とするようになった。団体型パッケージ旅行が主であった以前に比べ、近年、増加傾向にある個人型旅行者は、地域の人々との交流や地域のストーリーに関心を寄せる傾向があると言われている。それを特徴とした観光ビジョンを目指すことにより、既に有名な観光地としてのポジションを得ている都市とは差別化を図り、異なる方向性を目指す観光政策を掲げている（美唄市経済部観光振興課、2018）。

「交流」を観光の主体として推進していく際に言語の問題は課題となると予想される。観光庁の調査によると外国人旅行者が日本での旅行中に困ったこととして、「観光施設等のスタッフとのコミュニケーション」の問題は、平成28年～30年度の調査で毎回、上位（1位または2位）に挙げられている（国土交通省観光庁、2019）。美唄市ではまず市民向けの「おもてなし外国語、やさしい日本語による語学講座の実施」をアクションプランの一つとして掲げ、実施してきた（美唄市経済部観光振興課、2018）。

当稿では、留学生と日本の学生が共に学ぶ多文化クラスの授業にこの美唄市の観光政策と連携した活動を取り入れた試みについて活動の内容を簡単に記すと共に、参加学生がどのようにやさしい日本語の見解を発達させていったかを中心に考察することにより、今後の活動の運営へ反映させることを狙いとしている。

2．やさしい日本語を巡る諸相

やさしい日本語は日本在留外国人の増加と共に2000年前後から発達し始めたと考えられており、発端は1995年1月の阪神淡路大震災の際に日本語も英語も十分に理解できず、必要な情報を受け取ることが出来ない外国人の被害者が出たことであるとされている（東京都オリンピック・パラリンピック準備局、2014）。「外国人被災者に災害情報を伝えることを目的としたやさしい日本語」（佐藤、2004）は、その基盤を築いたと言ってよいであろう。その他、医療現場における医療従事者と外国人患者との意思疎通のためのやさしい日本語の整備の必要性なども指摘されるようになった。また、2012年より日本放送協会（NHK）が提供するNEWS WEB EASYでは、災害時の情報も含めた日常的なニュースをやさしい日本語で伝えている。日本在住の外国人の半数以上が英語を日常生活で使用しない国の出身者であり、日本の日常生活でも英語より日本語を使用している人の方が多い（庵、2016）。よって外国人にもわかりやすい日本語の使用は現実に即した動きである。2000年代後半頃からは、在日外国人が地域に根づいて共生していくための共通言語としてのやさしい日本語が提唱されるようになった。その特徴は、共通言語の共同構築のためには、母語話者の側が率先して変化していくことの必要性を強調している点である。これは母語話者を基準とし、母語話者の側が理想的言語モデルとして全く動く必要がなかった従来の外国語教育とは正反対の方向性である。またやさしい日本語がその社会に与える変化に着目し、受け入れることを決めたのであれば、同時に受け入れ側の社会も自らが変化していくことが求められることを自覚しなければならないという考え方で、多文化共生社会の在り方に通じるところがある（庵、2016）。

上記のようなやさしい日本語は主に日本在住の外国人を対象とし、「生活のための言葉」という側面が強い。それに対して日本を訪れる外国人観光客、いわゆるインバウンドの2010年代頃からの急激な増加に伴い、観光業の接客場面におけるやさしい日本語の使用機会が注目されるようになった。観光業の接客に際しての接触場面における「やさしい日本語ツーリズム」に着目した研究（加藤、2018）も行われている。2020年に予定されていた東京オリンピックにおいては、やさしい日本語をより広く普及させる機会として奨励されている（東京都オリンピック・パラリンピック準備局、2014）。

日本に長期間在住している外国人向けに発達したやさしい日本語は、観光関連のやさしい日本語ツーリズムとは性質を多少異にしていると考えられる。前者においては日本在住の外国人の半数以上は、日本語のみで何とか生活のための情報を得るという必要性に支えられている。それに対して観光関連のやさしい日本語は、日本に興味を持って日本語の学習をした経験のある人から全く日本語の知識がない人を対象とする場合も含めて考え、英語による補充も許容しながらの日本語使用であると考えられる。藤田・加藤（2018）は接客場面においてのやさしい

日本語と共に、英語についても従来よりもシンプルにし、かつ端的に伝達することを目的にした「やさしい英語」を加えて、必要に応じて使い分けることを提唱している。

しかし、在住外国人向けでも観光向けでも、やさしい日本語の法則性自体に大きな違いがあるわけではなく、通常の日本語をどのように調整すればやさしい日本語になるのかという点の根幹はほぼ共通している。藤田・加藤（2018）においては、観光の接客場面における口頭でのやりとりを中心とするやさしい日本語のルールを以下のようにまとめている。

1．はっきり・最後まで・短く
2．一気に話してしまわないでゆっくり、適当に間を空けて話す
3．文の最後は「です・ます」にする
4．単文を使い、一つの文では一つのことだけ伝える
5．簡単な単語や文法を使う
6．カタカナ語はあまり使わないようにする
7．漢語ではなく、和語を使う
8．敬語はあまり使わないようにする
9．可能形は「～ことができます」で表す
10．指示をするときは「～してください」を使う
11．擬態語や擬音語などのオノマトペは使わないようにする

このほか、ジェスチャーや物を指し示すことなどの、よりわかりやすくするための非言語コミュニケーション手段を加える工夫も奨励されている。

3．やさしい日本語を使った活動について

留学生と日本の学生の双方を擁する国際共修型の授業形態では、予想外に特定のメリットが留学生の側のみに限られたり、その逆に日本の学生の側のみに限られたりということが起きることがある。何かを取り入れる際には両者が同時にメリットを得られるという点からの十分な検討が必要であり、やさしい日本語を取り入れることに関しても、両者がその教育的効果を十分に享受できるかどうかをまず熟考した。留学生にとって、大学のキャンパス外において日本語を使って日本の一般市民との交流を行うことは明確な教育的意義があると考えられた。上級レベル未満の日本語力の留学生からは、大学のキャンパス内でも日本語を使う機会がないという声を聞くことが多い。当科目を履修する留学生の大半が初級～中級前半程度の日本語力をもち、まさにやさしい日本語のレベルに適している。一方、日本の学生にとっては、北海道大学

の場合は半数以上が道外出身者であり、札幌市以外の北海道の都市を知ること、また留学生が日本語を使ってコミュニケーションする場における補助役をすることにより、どのように伝えたらわかりやすいかのスキルを得ることができ、外国語を使う際に応用できる可能性があるという点をメリットと考えた。

その他、留学生、日本の学生を問わずメリットと考えられたのは、美唄市のやさしい日本語を取り入れた観光政策と連携する活動を授業に取り入れることにより、日本の地域社会の抱える問題や多文化共生の動きについて知ることができることである。それに加えて英語を媒介語とする授業に場面を限定してやさしい日本語を取り入れることにより、授業を「部分的バイリンガル形式」にすることも、留学生、日本の学生の両者にメリットをもたらすと予想された。国際共修型授業においては、使用言語の母語話者と非母語話者の双方が含まれる空間を言語の障壁を超えて発言しやすい場にすることは、大きな課題の一つである。共通に使用する言語が一つの場合、各学生の言語運用力に付随した、有利、不利が固定されてしまうことがある。バイリンガル形式を取り入れた多文化クラスの例は他大学にも見られ、田崎（2017）のように学生の自然なコードスイッチングに任せた二言語併用形式の例もある。バイリンガル形式のメリットとして、すべての学生が必ず日英どちらかの言語の第二言語話者という立場を経験することが考えられる。しかしバイリンガル授業は自然に任せると、学生の使用言語の選択の調整が難しい場合もあり、結局は一方の言語に偏ってしまうことも多い。そこで当授業は英語を媒介語として行う多文化クラスとして英語をクラス活動での共通言語としながらも、やさしい日本語を使う場面や活動を美唄市との連携を行う活動に限定することにより、英語を使う場面、日本語を使う場面を明確に分けた。

美唄市と連携したやさしい日本語を取り入れた活動は、北海道大学において国際交流科目として提供している「Workshop on Intercultural Communication[4]」で実施し、2019 年度後期授業、2020 年度前期授業で取り入れた。

実際に美唄市を訪れ、美唄市内でのフィールドワークと一般市民とのやさしい日本語を使った交流会を実施し、それに関するプロジェクトを教室活動として行う計画を考えた。2019 年度後期授業はその通りに実施できたものの、2020 年度前期授業では折しも日本における新型コロナ肺炎感染の流行による緊急事態宣言が発令された時期と重なり、活動内容を多少変更してすべての活動を Zoom を利用してオンラインで実施した。これらの活動をまとめると、以下のとおりである。

（1）美唄市内でのフィールドワーク（2019 年度後期、11 月 9 日美唄市で実施）

美唄市内の駅やバス停などの交通機関に関係する場所、観光名所に関する案内表示を観察し、「外国人観光客」の視点で課題を検討する。

(2) 美唄市民とのやさしい日本語交流会（2019 年度後期、11 月 9 日美唄市で実施）

日本語母語話者も留学生も、出身地の紹介などを話題にやさしい日本語を使って話した。幅広い世代の市民約 20 名が参加した。

(3) グループプロジェクト：美唄市への提言ポスター作成（2019 年度後期、授業内活動）

美唄市内のフィールドワークで気づいた美唄市内の言語表示の課題について「美唄市への提言」として日英両言語でポスター形式でまとめた。言語で説明する負担を少なくする意図でポスター形式にした。（付録 1 ）

(4) 接客場面におけるやさしい日本語表現リスト作成（2020 年度前期、オンライン授業内活動）

やさしい日本語を体得するため、宿泊施設、飲食施設、商店などの接客場面で使われると考えられる表現の日英両言語のリストを、留学生、日本の学生の協働作業で作成した[5]。

(5) 美唄市民とのやさしい日本語交流会（2020 年度前期、オンライン授業内活動）

出身地の紹介や現在の大学生活についてのやさしい日本語を使用したやりとりを、少人数（一度に 2 名程度まで）の美唄市民に参加してもらい、6 セッションほど実施した。

(6)「やさしい日本語びばいのブログ[6]」掲載記事執筆（2020 年度前期、オンライン授業内活動）

やさしい日本語についての考えを、留学生、日本の学生の協働作業でブログ記事として、やさしい日本語、英語で作成した。（付録 2 ）

以下に、留学生 8 名（アメリカ 1 名、イギリス 1 名、インドネシア 1 名、カザフスタン 2 名、台湾 3 名）と日本の学生 10 名の産出した振り返り、課題レポート、インタビューを対象データとして、学生たちがこれらの活動を通じ、どのようにやさしい日本語の概念を捉えていったかの考察を述べる。研究倫理上の手続きとしては、所属先の教務委員会への申請、承認を得た上で、データ収集の目的、データの扱いにおいて匿名性、守秘義務が守られ、他の目的に使用されることはないこと、データ収集への参加の可否は学生の自由意思によることを説明し、同意の得られた学生が産出したものを対象としている。

4．考察

振り返りやレポート、インタビューの中から、個別の活動ではなく、やさしい日本語という概念をどのように捉え、見解を発展させたかに焦点のある部分を選んで以下に記した。興味深いことに、留学生の側、日本の学生側の双方とも共通して、やさしい日本語を産出することの難しさに触れている見解が目立った。母語話者として自然に習得してきた日本語を別の視点からとらえ直し、前述のような基本的なやさしい日本語の法則性を学んだ後でも、何をどうしたら「やさしい」日本語になるのかというポイントがなかなか掴みにくかったようである。

やさしい日本語の提唱の流れを作ってきたのは、「外国語としての日本語教育」を専門分野とする学者たちである。このような日本語教育の専門家、日本語教師らにとっては、初級日本語教科書の文法項目の提出順は、何度も教科書を使用することにより暗記しようとせずとも頭に入っている。よって彼らが日本語で日本語非母語話者とやりとりする際、相手はどの程度の日本語レベルかを瞬時に察知し、自分自身の使う日本語文型、語彙を初級日本語教科書の提出順に頭の中で照らし合わせて素早く調整することは難しいことではない。いわゆる「ティーチャー・トーク」と呼ばれるもので、たとえば英語教育においても英語の母語話者教師の発話が非母語話者にとって非常に理解しやすいのはそのためである。しかし、外国語としての日本語教育に携わったことのない者にとっては、ある項目や表現が「非母語話者にとって」やさしいか、わかりやすいかという点になかなか確信が持てないということも多いようである。

また、言葉の使い方そのものよりも「相手を思いやるマインド」が重要ではないかという観点が、留学生、日本の学生の双方から出されてきたのも興味深い。これは庵（2018）が強調している点で、まず、言語的な弱者を思いやる「マインド（心構え）」があるから「わかりやすさ」が生まれるという、まずマインドありきの考え方である。

(1) 留学生の視点からの「やさしい日本語」に対する見解[7]

> When we try to make the sentences easier, I wonder they become very similar to what children say.
> （文を簡単にしようとすると、子供が使うような表現に近くなっているような気がする。）

> As an intermediate Japanese learner, I can understand almost all the contents of the conversation in Yasashii Nihongo. Therefore, I think it is helpful for beginners of Japanese language. However, even if the language is simplified, it still can't be understandable for foreign tourists. I think simplified languages are only effective if the people already know

the languages a little.
（私は日本語は中級レベルで、やさしい日本語での会話の内容はほぼすべて理解できる。だからやさしい日本語は日本語初級の学習者にとって役に立つと思う。しかしその言語がどんなに平易であっても、（日本語の知識がない）外国人観光客にとっては決して理解しやすくはないのではないかと思う。やさしい言語は、その言語の知識が多少ある場合にしか、効力を持たないのではないかと思う。）

In theory, it just makes sense to use a simplified version of your language to communicate to someone who is not a native speaker of your language. However, when it becomes a regulated and separate entity from the original language, it becomes just as hard as learning a new language.
（非母語話者とのコミュニケーションにおいて、平易にした言葉を使うのは理にかなっているが、それが原語から切り離して確立した別物となると、新しい言語を学ぶのと同じくらいの大変さになる。）

I could communicate with peace of mind there, because people were friendly and showing open mind. I think psychological and attitudinal factors are important in communication, as well as simplified languages.
（美唄の人は親しみがあってオープンだったので、自分は落ち着いてコミュニケーションできたと思う。コミュニケーションにおいて、心理面や態度面はやさしい言語と同様に大事な要素なのではないかと思う。）

(2) 日本の学生の視点からのやさしい日本語に対する見解

やさしい日本語って敬語とかなしにフランクに話すことだと前は思っていたので。結局、外国語としての日本語教育の初級レベルを知らないと使うのは難しい。

失礼に当たるかなっていう感じのときもあって、簡単にしすぎて、幼稚なのかなこの表現はって思うときもありました。「幼稚」か「簡単」かで悩んだり。

やはり日本語母語話者同士で話しているときには考えないことであり、短く簡潔にと言われてもすぐに思い浮かばないときもある。

やさしい日本語は軽い会話では便利であるが、深い話をするのは難しいのではないか。

他言語、他文化と触れ合う機会が多い人ほど、どう話すと相手にわかりやすく伝えられるのかが分かっているように感じた。

結局、言語は相手とコミュニケーションをとるためのものであるから、何かを話すとき、相手のことを思って理解できるように言葉を選ぶべきで、そのような態度や心が最も重要になってくるのではないか。

5．省察と展望

やさしい日本語を取り入れた活動は実際には易しいとは言い難く、行うは難しであると実感せざるを得ない状況にも直面した。2020 年オリンピック・パラリンピック大会に向けた多言語対応協議会ポータルサイトには「『やさしい日本語』とは、普通の日本語よりも簡単で、外国人にもわかりやすい日本語のことです」（東京都オリンピック・パラリンピック準備局、2014）との説明があり、簡潔でもっともではあるが、どんなに前述のようなやさしい日本語の法則性を提示しても、学生の記述にある通りで、では通常の日本語をどのように調整したら外国人にも「わかりやすい」のかという点を、一般の日本語母語話者が把握するのは容易ではないであろう。また、会話で何を話すかはそれぞれ異なり、そこで使われるやさしい日本語は使う人によってバリエーションが変わる。相手の言語レベルに合わせて人それぞれの言語調整行動を行うので、特定の表現や法則性を習得することやスキルを得ることで使いこなせるようになるわけではなく、前述のとおりで法則性の習得よりも、相手を思いやるマインドのほうが重要となり、これがやさしい日本語は難しいといった見解につながるのであろう。

ここで一度立ち止まって当稿をまとめたことにより、言語の習得の問題を超えた範囲で教育的示唆が見えることとなった。特に教育的示唆がほとんど留学生、日本の学生の双方に共通したものであったことは、予想外であった。当交流活動は今後もしばらく新しい試みを取り入れたり試行錯誤の末の調整を続け、多くの工夫を重ねていく必要があり、新しい発見を追究したいと考えている。

謝辞

データ収集への協力を得た履修学生に謝意を表する。

美唄市経済観光課、James McIntyre 氏（同課職員）、佐藤花美氏（同課元職員）、近藤孝志氏、小野豪大氏による継続的なご支援、加えて活動にご参加頂いた他の美唄市民のみなさまへ

の謝意も、ここに合わせて表する。

本研究は JSPS 科研費 JP18K00775 の助成を受けたものである。

参考文献

庵　功雄（2016）『やさしい日本語―多文化共生社会へ』岩波書店

――（2018）「〈やさしい日本語〉に期待すること」『〈やさしい日本語〉と多文化共生シンポジウム予稿集』学習院女子大学、pp.19-24

加藤好崇（2018）「観光接触場面における「やさしい日本語」の可能性と課題：柳川市やさしい日本語ツーリズム事業の実例からの考察」東海大学大学院日本語教育学論集　1、pp.30-44

国土交通省観光庁（2019）「訪日外国人が旅行中に困ったこと、受入環境整備の課題が明らかになりました　～受入環境について訪日外国人旅行者にアンケート調査を実施～」https://www.mlit.go.jp/kankocho/news08_000267.html（2020 年 11 月 20 日参照）

佐藤和之（2004）「災害時の言語表現を考える―やさしい日本語・言語研究者たちの災害研究（特集　伝え方の諸相）」『日本語学』23（10）、pp.34-45

田崎敦子（2017）『接触場面における二言語使用の可能性　多言語多文化キャンパスの構築に向けて』ココ出版

東京都オリンピック・パラリンピック準備局（2014）「『やさしい日本語』について」https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/multilingual/references/easyjpn.html（2020 年 11 月 20 日参照）

藤田玲子・加藤好崇（2018）「やさしい日本語とやさしい英語でおもてなし」研究社

美唄市経済部観光振興課（2018）「美唄市観光ビジョン　平成 30 年度～平成 34 年度」http://www.city.bibai.hokkaido.jp/jyumin/docs/2018052800019/files/kankovision.pdf（2020 年 11 月 20 日参照）

1　日本の大学入試制度を経て入学してくる学生は、全員が日本国籍の所有者とは限らない。国際教育の分野では、「国際学生」に対して「国内学生」という呼称がよく使われるようになったが、一般的に普及しているとは言い難い。よって当稿では「日本人学生」の代わりに「日本の学生」と呼称することにする。

2　当稿が対象とする多文化クラスは、北海道大学では「国際交流科目」と総称され、英語を媒介語として留学生と日本の学生が共に学ぶ国際共修型授業を指す。

3　2020 年 10 月末現在で、約 11,000 人。

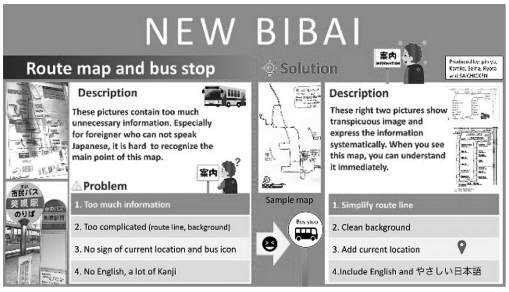
4　「全学教育科目　英語演習上級：異文化間コミュニケーションの実践」と合同開講

5　既に市販されている書籍もあるが、その種のものは参照せず、自分たちでオリジナルのリストを作成した。

6　https://ameblo.jp/bibaiyasashinihongo/（2020 年 11 月 20 日参照）

7　和訳は筆者による。

付録 1　やさしい日本語とやさしい英語による「美唄市への提言」ポスター例





付録 2　留学生と日本の学生が協働で執筆したやさしい日本語とやさしい英語によるブログ記事の抜粋

Have you ever used yasashi nihongo before?
やさしい日本語を使ったことがありますか？

As a foreigner, yasashii nihongo is a way for us to easily communicate with natives in our daily lives. Yasashii nihongo is intended to be clear and simple. For example, avoiding complex sentences, difficult vocabularies. By limiting the use of honorifics, using desu/masu form, and by speaking in simple sentences, you can use yasashii nihongo to simplify daily conversations and decrease the language barrier between foreigners and natives.
外国人にとって、やさしい日本語は話しやすいです。かんたんに説明するために、やさしい日本語を使います。例えば、むずかしい文と単語を使わないです。敬語を使わないようにしたり、「～です／～ます形」を使ったり、かんたんな表現で話すといった、やさしい日本語を使用すると、外国人とのコミュニケーションの問題がなくなります。

Here are some examples of simple English and Yasashii Nihongo that we created during class that can be used by staff and foreigners when handling payments in a shop.
以下は私たちが作った文の例です。これはお店でお金を払うときの、店員と客のやりとりです。

Payment	Cash or card?	cash キャッシュですか？card カードですか？
	That's 00 yen.	○○円です。
	This is your change.	おつりです。
	This is your receipt.	receipt レシートです。
	Please sign here.	sign サインをおねがいします。

Why is yasashii nihongo important? The number of foreign tourists is increasing, and the number of foreign residents is also increasing so we want to make conversation easier.
どうしてやさしい日本語を使うことが重要でしょうか？それは外国人観光客も日本に住んでいる外国人も増えており、会話するときにやさしい日本語はとても役立つからです。

Our experiences
私たちの経験から

As an international student, we are trying our best to learn the local languages. However, it is always difficult at the beginning, I still remember when I first came here, I lived in a small hostel near the school. The owner tried to explain how to use the kitchen to me but he couldn't speak English. So he used the simplest words that are easy to understand, which gave me the first impression on this country and also the confidence in learning Japanese.
留学生として、現地の言葉を学ぼうとがんばっています。しかし、初めはむずかしく、私は今でも初めてここに来たときに泊まったhostelのことを覚えています。hostelの人がkitchenの使い方を私に説明しようとしてくれましたが、彼は英語を話すことができませんでした。なので彼はわかりやすい言葉を使ってくれました。そのことは私に日本語を勉強する自信をあたえてくれました。

As an intermediate level learner of Japanese, I usually don't have trouble when talking with Japanese teacher because they always try to avoid difficult expressions. However, when I go to stores or restaurants, it is totally different since the staff would use keigo and harder expressions. For me, going to fast-food shops is the most difficult. Staff at fast-food shops always speak very fast and there are a lot of loan words. I usually end up ordering dishes by pointing at the pictures. It's true that the staff are always willing to say again but they seldom slow down or use easier expressions. Therefore, I think yasashii nihongo should be promoted

so that people will know that sometimes you need to change the way you talk.
私は日本語をある程度勉強しているので、かんたんな表現で話してくれる日本語の先生と話すのにはあまり困りません。しかし、お店やレストランでは、お店の人が敬語やむずかしい表現を使うので、困ることがあります。私にとって、ファーストフードの店が一番むずかしいです。ファーストフードの店ではスタッフがいつもとても速く話します。また、彼らはカタカナ語をよく使います。私はけっきょく、メニューを指さして注文します。スタッフはもう一度言ってくれますが、ゆっくり話したり簡単な表現を使うことはほとんどないです。それで、ときどき話し方を変える必要があることを知ってもらうために、やさしい日本語を広めるべきだと思います。

As a Japanese, I think it is Japanese who need to know about Yasashii Nihongo more. If Japanese keep using natural Japanese at the same speed without changing difficult vocabulary and sentences as they are, non-native speakers with limited skills of Japanese cannot communicate. We need to consider the usage of language which can be shared by both Japanese and foreigners. However it is unexpectedly difficult for Japanese people to make their usual Japanese to Yasashii Nihongo.
日本人も、いや、日本人こそ、やさしい日本語についてもっと知るべきではないでしょうか。日本人どうしで使う日本語をそのままのスピードで、むずかしい単語や文を話しつづければ、日本語が少しわかるという人たちが、話に入って来られなくなります。日本人と外国人とのコミュニケーションをするのなら、相手もわかるような言葉の使い方を考える必要があります。でも、いつも使っている日本語から、やさしい日本語にするのは、意外とむずかしいです。

（やさしい日本語びばいのブログ　https://ameblo.jp/bibaiyasashinihongo/）

（2020 年 11 月 26 日提出、2021 年 1 月 26 日受理）

《SUMMARY》

A Report of Yasashii Nihongo (plain Japanese) Activities with Locals in Multicultural Classrooms

YAMADA, Etsuko

This is a report on activities using “Yasashii Nihongo (plain Japanese)” in multicultural classes where international and Japanese students studied together. They were planned in cooperation with the tourism policy of Bibai City promoting hospitality of local residents to welcome any visitor using Yasashii Nihongo. The activities included fieldworks in Bibai, online communication with Bibai locals and group projects. It was found that both international and Japanese students developed similar views on the concept of Yasashi Nihongo. Both native speakers and non-native speakers pointed out that it is difficult to produce Yasashii Nihongo and attitudes and mindset to consider non-native speakers can be as important as pragmatic language skills.